



# 図書館司書だより

札幌市立琴似中学校  
学校図書館司書  
林 真知子

第18号 2020. 1. 23

新しい年になりました。今年は雪も少なく、おだやかな年の幕開けとなりました。皆さん、冬休みはどのように過ごしましたか。本を読む機会がありましたか。

図書館の方も3学期の開館がはじまりました。引き続き、たくさんの人が図書館に来ることを願っています。今年もよろしくお願ひ致します。

## ～新刊本の紹介～

本屋に立ち寄るたびに新刊本の多さに驚きます。最近、私（司書）が読んでみて、比較的読みやすく、ちょっと感動できる本を紹介したいと思います。是非、読んでください。

（●：図書館にある本 ○：これから入れる予定の本）

### ○小川糸『ライオンのおやつ』（ポプラ社）

瀬戸内海にある島のホスピスで、余命を知った主人公が過ごす日々のことが、周囲の人々とのかかわりを通して、明るく描かれる。ホスピスでは、毎週日曜日、入居者がリクエストできる「おやつの日」がある。しかし、主人公はなかなか選べずにいる。最後に選んだものは……。すべての人々にいつか訪れるであろう時があたたかく描かれる。



### ●三浦しをん『愛なき世界』（中央公論新社）

2019年本屋大賞にノミネートされた作品。食堂で料理人の見習いをしている主人公は出前先の某国立大学の生物科研究室で、大学院生の女性と出会い、心惹かれる。やがて、植物の研究に励む彼女と主人公とはお互いの生き方に影響されながら絆を深めていく。

他に、『舟を編む』『風が強く吹いている』もおすすめの作品です。

### ●知念実希人『ひとつむぎの手』（新潮社）

大学病院で過酷な勤務に耐えている主人公は、三人の研修医の指導を指示される。この指導の結果により外科医への道が開けるが、失敗すれば……。主人公を告発する怪文書が出回ったりするなどの医療ミステリードラマ。

### ○乾ルカ『明日の僕に風が吹く』（KADOKAWA）

将来は医者になりたいと思っていた主人公だが、引きこもりになってしまう。叔父のすすめで北海道の離島で生活するようになる。高校生5人という島での生活、医療問題の考え方などに戸惑いながらも、最後には前向きに生きようとするようになる。



他に、○『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』○『虹いろ図書館のへびおとこ』●『火のないところに煙は』●『さざなみのよる』などがおすすめ。

## ～本を読みましょう～

皆さんも新聞やニュースなどで、こんな記事を見たことがあるかと思います。

日本の子どもたちは、理数分野ではトップレベルを維持したものの、読解力の低下が目立つ。経済協力開発機構（OECD）が昨年行った国際学習到達度調査（PIISA）で、そんな結果が出た。気がかりな状況である。……日本の平均点は「読解力」が15位で、前回の8位から下がり続けている。（読売新聞 2019. 12. 4）

この要因として、以下のことがあげられています。

- スマートフォンの普及により、子どもたちのコミュニケーションでは、仲間同士の短文や絵文字のやりとりが中心になった。長い文章をきちんと読み、分かりやすい文章を書く機会が減っている。
- 子どもたちの言語環境が急激に変わり、読書などで長文に触れる機会が減っている。

～皆さんはどう思いますか。是非、ご意見をお聞かせください～

最後に歌人である俵万智さんの言葉を載せます。

小説は個人が勝手に読めばいいという考え方もありますが、スマートフォンなどに時間を取られ、学校の国語が貴重な読書の場になっている現実があります。最も複雑な言葉のあり方で表現された古今の名作と、多感な時間に接することは未来への財産になるでしょう。そのとき理解できなくても、心に種をまいておけば、大人になって読むきっかけになります。（読売新聞 2019. 11. 22）

### 雲海

川崎 洋

地上から見ているのは  
じつは  
雲の裏側だった と気付く  
精神が  
低いところを  
徘徊しては  
生きることの意義の  
輝かしい表は  
見えない と  
雲海は 告げている

（川崎 洋 詩集『ビスケットの空きかん』から）

